平成　25　年　3　月　21　日

地域貢献活動支援報告書

社会連携研究センター長　殿

所　属　医学部看護学科 成人・精神看護学講座
氏　名　土田 幸子

活動テーマ	精神に障がいを抱えながら子育てする親と子どもへの支援
実施期間	平成 24 年 7 月 1 日　～　平成 25 年 3 月 31 日
活動内容	❖ 母子生活支援施設で生活する親子の実態調査 うつ等の症状を持ちながら子育てしている親とその子どものやり取りの観察として、協力が得られた母子生活支援施設に 9 月から 2 回/月の頻度で訪問し、4 組の親子を対象に 1～8 回の訪問・観察実施した。明らかな精神症状はなかったが DV 被害者であり、仕事が続かない、眠れない、大量服薬した経験があるなど抑うつ症状を持つ母親も多く、イライラして子どもに当たったり、子どもに落ち着きのなさや言語発達の遅れがみられた。こうした母親の育児等に対する困りごとを聞き、親子の関係が良好となるよう、母親が気づいていない子どもの良いところを伝えたり、子育て支援プログラム「CARE」で用いられている技法を紹介していった。また、共同実施者と開催した「CARE 講座」への参加を呼びかけ、3 名が参加した。 ❖ 学校・地域等へのフィードバック 実施者がこれまでに行ってきた精神障がいの親と暮らす子どもへのインタビュー(研究)から明らかになった「精神障がいの親と暮らす子ども」の特徴等を、学校の教員(5 月,10 月)、人権にかかわる相談員(6 月,3 月)、子育て支援者(9 月に 2 回,3 月)を対象とした研修会で伝達し、こうした子どもの理解を図ると共に、子どもが SOS を発したり健全に育つことができる環境として、どのように関われば良いかを伝えていった。 また、四日市教育委員会が中心となって取り組んでいる「四日市早期支援ネットワーク(YESnet)」において、精神障がいの親と暮らす子ども(事例)がテーマで検討される時には参加(2 回)し、これまでの経験から子どもの状況や支援等に関して考えられることを助言した。 ❖ 子どもへの支援を考える講演会の開催 「支援を繋ぐ～自分たちに何ができるか～」をテーマに平成 25 年 2 月 17 日(日)に医学部臨床第 3 講義室において『第 4 回 親＆子どものサポートを考える会 講演会』を開催し、子どもを支援する立場にある教員や民生委員、行政・福祉職員、一般市民など 144 名の参加があった。今年度は、子ども支援に関わる機関の職員よりそれぞれの機関でどんな支援ができるか説明していただいた後、架空事例を用いてそれぞれの機関がどのように関わり連携していけば良いのかを提示することによって、一機関・個人で抱え込むのではなく、連携し合うことで支援にも広がりが出てくることを感じてもらえるように企画した。

	参加者から、「何ができるのか考え、できないところは分野の違う人と話し合う機会を持つことが大切と感じた」という感想も聞かれ、子どもの周りに存在する大人として「自分に何ができるか？」を考える機会となっていた。また、支援を繋げるコーディネーター的な役割や、地域で目配りし合っていく体制が必要との声が上がる等、地域の組織作りにも貢献できた。 ❖ NPO との共同開催・連携した取り組みについて DV 被害の女性とその子どもへの支援活動を中心に取り組んでいる NPO 法人女性と子どものヘルプライン MIE で、子育て支援のプログラム「びーらぶ」と、親と子どもの絆を深める心理教育プログラム「CARE」の開催を企画してもらい、ファシリテーターとしてプログラムに参加した。「びーらぶ」に関しては、対象者の参加状況から当初予定していた 8 月は中止となったが、12 月・3 月は 4～8 組の親子が参加し、母親には「トラウマ」や「自分自身を大事にする」ことを、子どもには「自分も相手も大事にすること」ことを学んでもらう内容を含んだプログラムを実施した。本来「CARE」は、1 回 3 時間半で実施できるプログラムであるが、抑うつ傾向が強かったり、子育てに自信がない参加者が多いため、1 回のプログラムを 2～3 回に分割して実施する形式をとった。また、毎回、振り返りの時間を持ち、前回の復習と共に、実践してみてうまくできなかったところや困ったところを出して合ってもらうフォローアップ形式を取ったため、子育てに自信がない参加者もプログラムに馴染みやすく、親子関係が有効になるよう働きかけることができた。「CARE」参加者の反応が良かったことから、3 月・4 月の 2 回に分け、前回とは違う参加者に対して「CARE」プログラムを実施中である。 母子生活支援施設に入居中の母親など、今回の活動で知り合ったイライラした状況で子どもに当たってしまう母親などに「びーらぶ」や「CARE」のプログラム参加を呼びかけ、「びーらぶ」には 1 組の親子が、「CARE」には 3 人の母親が参加した。 ❖ 大学教育・研究結果の関わりに関して DV 体験等を持ち母子生活支援施設に入所する親子との関わりや、研究結果のフィードバックを通して、子ども支援に関わる教員や相談員、子育て支援者とやり取りする中で、現在行われている支援の殆どが、“親”や“子育て”といった 1 つの事象に焦点が当てられ、“精神的不安定さを持つ親の元で育つ子どもの生活や気持ち”と背景を含んだ捉え方・支援には繋がりにくいことがわかった。こうした課題(支援の在り方)を学生への教育にも取り入れ、活動や研究から明らかになったことを社会に提言していくことも必要と考える。